翻刻「踊る一寸法師」草稿

〈解題〉

専業作家になることを決意した乱歩は、大正十三年末、大阪毎日新聞社広告部を退社する。そしてそのまま大阪の守口にある父の家にとどまり、作品を書き続けていた。

翌大正十四年は、作家江戸川乱歩にとって重要な年となった。「D坂の殺人事件」「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」といった、代表作となる短篇をつぎつぎと発表し、初の単行本となる短篇集『心理試験』を刊行する。乱歩は、探偵小説の第一人者としての地位を確固たるものとしていったのである。

少し後になって、昭和四年に『世界探偵小説全集』江戸川乱歩集跋文として書かれた「あの作この作」は、のちに「楽屋噺」として平凡社『江戸川乱歩全集』第二巻にも収録される。大正十二年の「二銭銅貨」から昭和四年の「虫」までの、作品が生まれた状況を自ら解説した文章である。

この文章で乱歩は「「新青年」の翌十五年正月号の為に「踊る一寸法師」を書いた。十四年十月である」と書いている。

「これは十枚ばかりを大阪の自宅で書き、後半十枚あまりを東京のホテルで書いたものです。という訳は、当時私は、小説を書き出してからの、第二回目の東京行をしたので、別に意味があったのではなく、横溝君がある雑誌の懸賞に当選して、五百円ばかり稼いだものだから、それで以て上京したいという事で、行を共にしたという様なことでした。」

このような説明があり、つづいて、雑誌「探偵趣味」（大正十四年十二月）に掲載された「上京日誌」が引用されている。これによれば、乱歩と横溝は、十月三十一日に名古屋で小酒井不木や国枝史郎と会った後、東京に行っている。翌日から、森下雨村をはじめとする「新青年」周辺の作家たちと会う。ほかにも、白井喬二や長谷川伸など大衆文藝の会にも出席したり、「苦楽」「キング」といった雑誌の関係者とも会っている。「上京日誌」は、この期間についての詳細な報告となっている。

「楽屋噺」では、さらにそのあと、この「踊る一寸法師」という作品の発想について説明されている。

「さて、「踊る一寸法師」の思いつきであるが、ポオの短篇の内で、前々から是非使って見たいと思っていた筋が二

つある。一つは「ホップ、フロッグ」もう一つは「スフィンクス」である。「スフィンクス」は未だに扱い兼ねているけれど、「ホップ、フロッグ」の方は即ち「踊る一寸法師」である。翻案とか真似とか云うには余り離れすぎているけれど、「ホップ、フロッグ」みたいな味をねらって（実は狙いそこなって）あんなものが出来た訳です。」

このように、エドガー・アラン・ポーの影響を受けて、この「踊る一寸法師」という作品が生まれたことを説明しているのだった。いうまでもなく、乱歩はポーの愛読者であり、これより数年前に乱歩自身が作成した手製の本『奇譚』でも、ポーにあてられたページは多く、最も重要な作家と認識されていたことがわかる。また、この記述にある「スフィンクス」については翻訳も試みていて、そのメモも残されている。

今回紹介する「踊る一寸法師」草稿も、これまで紹介してきた「D坂の殺人事件」「人間椅子」の草稿などと同様に「EXTRAORDINARY」と書かれた封筒にまとめて入れられていた。冒頭にタイトルと著者名がしっかりと書かれているところからすると、ある程度の腹案は出来ていたのだろうが、わずか四枚で途切れているので、それほど進んだ段階でのものとは考えにくい。

発表された「踊る一寸法師」は、曲芸師たちのあいだでいじめにあっていた一寸法師が、皆の前で披露した串刺しの奇術の中で、女軽業師を本当に殺したかのような展開を見せ、そののち煙の中に消えてしまう、という話になっている。

ここで紹介する草稿のほうでは、「私」の語り出しの説明のみで終わっている。その部分だけ比較してみても、発表されたものとはだいぶ異なっているので、さきほど引用した乱歩の回想にあった、家で書いた前半の「十枚ばかり」にあたるものとはまた別の原稿のようである。先の「楽屋噺」では、「そして出来上がると、これも横溝君に読み聞かせた。同君のその時の批評は、前半は面白いけれど、後半は急いで書いた丈け聞き劣りがするということであった」というように、横溝正史の感想も報告されている。前半と後半がそれぞれどのように書かれたものなのか乱歩が説明したうえで、横溝がこのようにコメントしたのかどうかはわからないが、前半部の方が練られたものであったことが、横溝の感想にもあらわれている。

草稿に書かれた内容を見て行くと、まず、記憶のなかのあいまいな情景についての説明から始まっている。こういったことは、たとえば「白昼夢」でも描かれているし、また

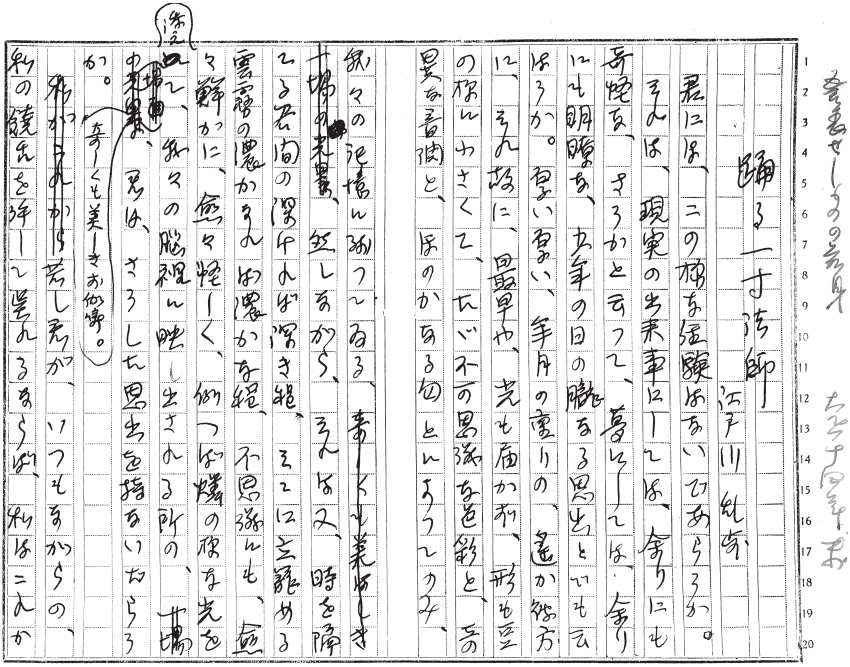
後の「押絵と旅する男」などでも使用されるものであるが、ここでもそれが使われている。

ここから女軽業師が描かれたところで原稿は途切れる。発表されたほうの筋を知ったうえで見れば、このあと人殺しの奇術に関する話が展開されるであろうことが予想されるところである。

掲載された「踊る一寸法師」冒頭は、「オイ、緑さん、何をぼんやりしているんだな。ここへ来て、お前もお相伴にあずかんねえ」という声掛けから始まる。「おらあ、酒は駄目なんだよ」と繰り返す「豆蔵の緑さん」に、無理矢理酒を飲ませる。以下、物語は会話を多く用いて進んで行く。

この「踊る一寸法師」は、大正十五年一月号の「新青年」に掲載された。乱歩は、同じく一月に東京都牛込区筑土八幡へと移る。今回は旅行ではなく転居であった。これ以降、乱歩は東京で活動することになる。つまり、乱歩大阪時代の最後に、この「踊る一寸法師」が書かれたことになる。

落合教幸
（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）



発表せしものの前身　大正十四年末

踊る一寸法師

江戸川乱歩

君には、この様な経験はないであらうか。

それは、現実の出来事にしては、余りにも奇怪な、さうかと云って、夢にしては、余りにも明瞭な、少年の日の朧なる思出とでも云はうか。厚い厚い、年月の重りの、遙か彼方に、それ故に、最早や、光も届かず、形も豆の様に小さくて、たゞ不可思議な色彩と、奇異な音調と、ほのかなる匂とによってのみ、我々の記憶に残ってゐる、[奇しくも美はしき一場の光景] 然しながら、それは又、時を隔てる空間の深ければ深き程、そこに立籠める雲霧の濃かなれば濃かな程、不思議にも、愈々鮮かに、愈々怪しく、例へば燐の様な光を添え■て、我々の脳裡に映し出される所の、[一場の光景] [場面] [奇しくも美しきお伽噺。]、君は、さうした思出を持ないだらうか。

[私がこれから] 若し君が、いつもながらの、私の饒舌を洋一に笑ふるなら、私はこれか

[ ] 消してある部分　〔 〕挿入部分
■ ぬりつぶしてある文字　□ 判読できなかった文字

許して呉れるならば、私はこれから、その様にして、まるで精巧な毛彫りの［如く］［様に］［その］癖［その］所々は、溶けて了っ［た様に］［た様に］跡方もなくなつて［ゐる］、それ故、■［この話には］随分、［話に］つぢつまの合はぬ所があるかも知れない■私の脳髄に刻み込まれてゐる、美しくはあるが、気味の悪い、一つの物語を聞いて貰いたいのだが。

それが何時のことであつたか、又何所の土地に起つたことであつたか、私は少しも覚えない。それを思［ひ］出す時に、先づ最初、私の記憶に浮んで来るものは、蓬蓬と雑草の生ひ茂つた、灰色の廣場、そこの背面には、同じ様に雑草に覆はれた、低い丘、その上は、黒天鵞絨の様に濃かな夜の空、そして、廣場の中央には、あたりの陰鬱な情景とは、際立つた対照をなして、一つのきらびやかな見世物小屋が立ってゐるのだ。

大礼服をつけた、陸軍大将の胸の様に、赤に、青に、紫に、或は金色（こんしき）に、光り輝いた見世物小屋の装飾が、どの様に私の心を惹きつけたか。そして、その小屋の中で演じられる、様々の珍らしい演戯が、殊に、みめ美しき一人の女軽業師の姿が、どの様に私の心を捉へたか。私の、この取［り］とめもない夢物語は、まづそ■［の辺］から始まって

ゐるのだ。

そこでは、錦襴の裃に白足袋をつけた女大夫（おんなたいふ）が、［花模様の日傘を片手に］両手に桜の花傘を翳して、綱渡りの曲藝を演じてゐるかと思ふと、ピッタリと身に着いた、紅白だんだら染めの、肉襦袢の娘達が、足と腰とをしなやかに振り動かしつゝ、玉乗りの軽業を演じてゐる。又は、当時それが流行してゐたのか、あの足藝といふものも、重なる演戯の一つだった。寝轉んだ男［の足の先に］が両足を空ざまにして、［その］足の先に［は］長い竹竿を立て、その頂上で幼い娘が、「ハッ」と、泣き出し相なかすれ聲をふりしぼって、様々の離れ業を演じるのや、同じく両足の上に大盥を立て、、それを車■の様にグル〳〵廻すと、盥の中では、小娘が■二十日鼠の様に、走り出すのや、……今、かうして目をつむつて、私の［脳］頭の中を見つめてゐると、それらの多彩な光景が、丁度二重露出の映画の様に、次から次へと、現れてはうすれ、又現れてはうすれて行く。

だが、［それらの］［そこで見た］数多い演戯の内でも、殊に私を惹きつけたものは、世にも残酷な、血腥い、人殺しの奇術であつた。

……今、かうして目をつむつて、紙の
幽霊の中を見つめてゐると、それらの多彩な
光景が、丁度二重露出の映画の様に、次から
次へと、現れては消えすれ、又現れては消え
て行く。
だが、(まこと見れば)実多い淫蕩の女でも、特に
紙を焦きつけたものは、世にも残酷な、血腥
い、人殺しの芸術であつた。